



みやま市観光振興計画

第4章

ネットワーク形成のための課題

(ソフトづくり)

この章では、観光案内の体制づくりや、商品開発のネットワークなど、これまでのみやま市に存在しなかった観光や物産にまつわる人的つながりの必要性和、それをどのように組み立てるかを記述しています。

4-1：ネットワーク構築の必要性

4-2：課題とその解決策

本坊庭園の落葉

杉苔の上に、紅葉の葉がひらひらと舞い降りて、緑と赤や黄色の美しい対比を見せる秋の本坊庭園。一枚一枚の葉は、思い思いに落ちてくるように見えるが、実は、然るべき場所に降りてきて、この借景の庭を引き立てている。それぞれの落ち葉がそれぞれの役割を担って、秋の美しい光景を出現させている。

4 ネットワーク形成のための課題（ソフトづくり）

4-1 ネットワーク構築の必要性

4-1-1 観光客へのアプローチ

みやま市を訪れる観光客の多くは、ごく一部の限られたみやまの人々と交流して帰っていきます。その結果、50万人を超える年間の観光入込客の大半が日帰り客となっています。そうした状況を変えていくためには、みやま市民と観光客との接点を増やし、その滞在時間を延ばしていくことが効果的です。

みやま市には多くのすばらしい場所・物語性（観光資源）がありますが、それらの多くは、詳しい人が直に説明をしなければ他所からの来訪者には理解しにくい、あるいは、そもそも目に留まらないものでもあります。みやま市民は、そのことをいち早く察知し、如何にして来訪者に対してアプローチを仕掛けていくかを考える必要があります。



イベント時の対応

客と店主のわずかな時間の交流だが、客はその土地についての様々な情報を得て、興味を抱く
(清水山もみじ狩り)

例えば、代表的な観光スポットである清水山を訪れた客が、その帰途に寄り道をしたと考えても、具体的に観光案内所のような場所で尋ねることはできませんが、紅葉の季節で多くの地元出品者が居る場合には、観光客は彼らを通じてみやまの生の情報を得ることが可能です。情報収集はインターネット全盛の時代とはいえ、人間同志の交流は、旅情を盛り上げる大きな要素です。みやま市民は、そういう場を市内各所で増やしていかなければなりません。



白秋の書

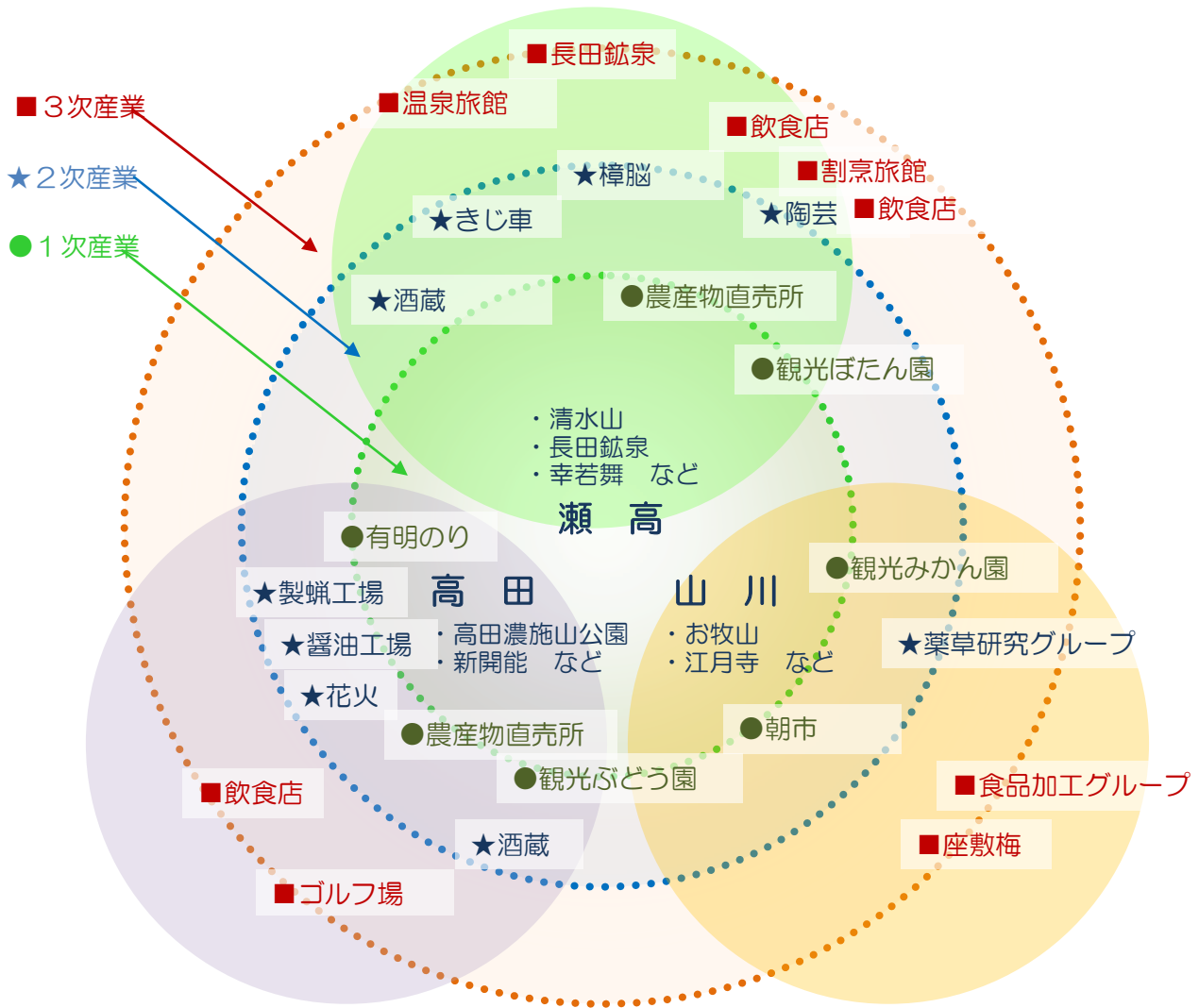
この酒蔵には親戚であった北原白秋の書が多数伝わる。蔵を訪れた観光客に公開し、文学的旅情をより豊かにしている
(菊美人酒造)

現時点では、第3章に示すような人的なつながりはみやまの中には未構築です。それは、従来のみやまの産業に占める観光的要素が少なかったことにも起因しますが、観光客のニーズに即して対応していくことを考える必要があります。そのことにより、多くの人々にみやまの情報を届け、観光的興味・関心を育てます。

みやま市内の人々のつながりを以下のように示します。
 図中に示す様々なカテゴリーごとにネットワークを組み立てることができます。

他にも、展開次第で様々なネットワークを組むことが考えられます。

図9:みやまの人々のつながりと拡がり



ネットワークの例

○地域ごとのネットワーク

合併前の旧町域単位などを想定します。自転車やウォーキングなどの観光ニーズに対応します。

(例：長田地区における鉱泉～樟脳づくり体験～旅館での宿泊 など)

○業種ごとのネットワーク

特に製造業の作業風景などを見学・体験できるコースを実現するためのネットワークで、市域全体を結び、花火や和ろうそくなどみやまの個性を表現できます。

○6次産業化のネットワーク

農業の現場から加工の現場までを総合的に案内するためのネットワークです。

4-2 ネットワーク構築の課題

4-2-1 みやまの旅の魅力を伝える



水汲み（長田鉱泉）

地元はもとより、休日には高速道路を使って遠方よりも炭酸水を汲みに来る人が絶えない。ここに集まるお客さんは概ね健康志向が強い人々であり、健康に特化したみやまの魅力を伝えることができれば、ここを起点にしたツアーになる。

前項に示すように、みやま市の中で複数のコース（観光客が市内を連鎖的に回遊するためのルート）を想定してネットワークを組むことは、すなわち、みやまの魅力を総合化して伝えるということの意味をしています。つまり、単独では面白さや観光的ニーズを満足させることに限界がありますが、複数あるテーマや視点によって連続することによって、みやま市という場所の魅力を端的に表現できるようになる可能性があるということです。

そのためには、観光客のニーズに対応したテーマ設定や視点を持つことのできる人材が不可欠です。前項に上げられた人物群の中からそうした人物が登場するのが（地元をよく知っているという意味で）理想ですが、従来、観光業が育たなかったみやま市においては、それは困難を伴う恐れがあります。

また、実際にコースを設定するための様々な作業や調整の仕事量を考えれば、本業を抱えての余力で対応することも難しく、結局は担い手が見つからないという事態も起こり得ます。この任は、みやまの全体像を正確に理解しつつ、関係者との信頼関係を築き最新の情報を常に収集しておく必要があります。



工場見学時の風景

手作りの工程説明コーナー。来訪者は興味深く工場の様子を見学し工場側も嬉しく思う反面、時間帯によっては工程の都合や多忙のため案内できないこともある。
（製蠟工場にて）

業種によっては、観光客に公開される作業や時間が限定されるものもあり、そうした事情も把握していく必要があります。そうした情報が集まり易く、かつ観光客・消費者との接点生まれやすい場所は、平成 23 年 3 月にオープンする「道の駅 みやま」です。市と観光協会では、この場所で観光情報の提供を行うことから始めていきます。

4-2-2 みやまの旅のコーディネートする

将来的には、みやまの旅の魅力を客のニーズに即してコーディネートできる能力を、市内に備える必要があります。その能力とは以下の3点です。現時点で、適任の人物はいませんが、今後の観光や物産にまつわる活動を通じて、適任者を育成していく必要があります。

能力1：みやまの特産品開発をコーディネートする

地元の様々な情報が集積し、観光客と日常的に接する立場は、観光客のニーズを満足させられる特産品開発を企画・コーディネートを考えるのに最適なポジションです。意欲ある生産者や加工者を束ね、時には営業的な売り込みも含めて、その世話を焼く人材が必要です。

(参考：「道の駅竜北」のケース)

能力2：旅行業に明るく、具体的にバスツアー等を企画する

情報提供ばかりでなく、主催者となってツアーを組み、そこから収入を上げて自立的な運営の財源の一部とする能力が必要です。

能力3：みやま市の観光資源に精通し、 観光客のニーズに合わせてコーディネートする

地元の関係者といつでも連絡を取り合えるような信頼関係を築くことが必要です。一方で、観光客から寄せられる十人十色のリクエストに答えられる企画センスも必要です。

参考事例の紹介「道の駅 竜北」

開業から約8年が経過した道の駅で、支配人氏は元大手スーパーの販売をしていた人物です。開業当時より農作物の直売はもとより、お菓子やレストランメニューを独自に開発し地元産品を加工品と売り出すことにも積極的です。また、道の駅の周辺の農場と連携した農村体験ツアーなども売り出し、地元住民と消費者とのつながりを築いています。「2009年直売所甲子園」(全国直売所研究会)において全国の100箇所の中の道の駅や直売所の中から準優勝に選ばれました。その評価理由は以下の通りです。道の駅が担う役割が、利潤を上げるばかりでなく、地元の人々(生産者や事業者)のビジネスチャンスの拡大に寄与するという公益的な役割に積極的にチャレンジしています。

梨と晩白柚の産地である強みをいかし、果物を使った加工品を50品目近く開発するなど地元の資源を丸ごといかした直売所運営で大勢を集約している。加工品開発にあたって地元企業との連携も図っている。近隣に大型店舗が出店し、売上げが低迷した折に「原点回帰」を掲げ、地元商品の開発や販促に力を入れた点は、他の直売所にとっても大いに参考になる。



「ここでしか味わえない」

店内のレストランにある懸垂幕。味覚で顧客獲得を狙うために独自のメニュー開発に励んでいる

(道の駅竜北のレストラン))



みやま市観光振興計画

第5章

ネットワーク形成に伴う環境整備について

(ハード整備)

この章では、みやま市民が観光や特産品開発に向けた取り組みを行っていく上で必要な環境整備について記述しています。

5-1：みやま市観光物産ネットワークの活動
拠点づくり

5-2：展開イメージ

高田濃施山公園

沢山の花や木が四季折々の表情を見せるこの公園には、通潤橋（熊本県）を模した橋があり、30分お気に放水する。郷土資料館やキャンプ場、パットゴルフ場などの施設を備え、幅広い年齢層を集める地区のシンボリックな公園となっている。

5 ネットワーク形成に伴う環境整備について（ハード整備）

5-1 みやま市観光・物産のネットワークの活動拠点づくり

5-1-1 縦系と横系の結び目を造る

みやま市には古くから薩摩街道が通り、現在も国道 209、443 号などの他にも九州自動車道や J R 鹿児島本線、最近では九州新幹線が南北に貫通し、新たに有明海沿岸の道路網の整備が進んでいます。



道の駅 みやま

163 台収容の駐車場を備え、みやま柳川インターに向かう車などを中心に、多くの立ち寄りが期待されている



卑弥呼の里

J A の女性部が運営するこの直売所は、新鮮さが売りで近隣の大牟田や筑後からも飲食店主らが訪れる人気である。早い時間に売り切ってしまう野菜も多い。



花野果館

J A の農産物直売所。高田地区をはじめ周辺地区の農産品が出荷されている。海岸に近いことから、海苔などの水産加工品が出品されている。

これは、交通インフラに恵まれているという意味では外部からアクセスしやすい立地ですが、逆に流出しやすい立地と考えることもできます。現に、J R 瀬高駅やみやま柳川インターは筑後地方で知名度の高い柳川観光への通過点ともいえます。

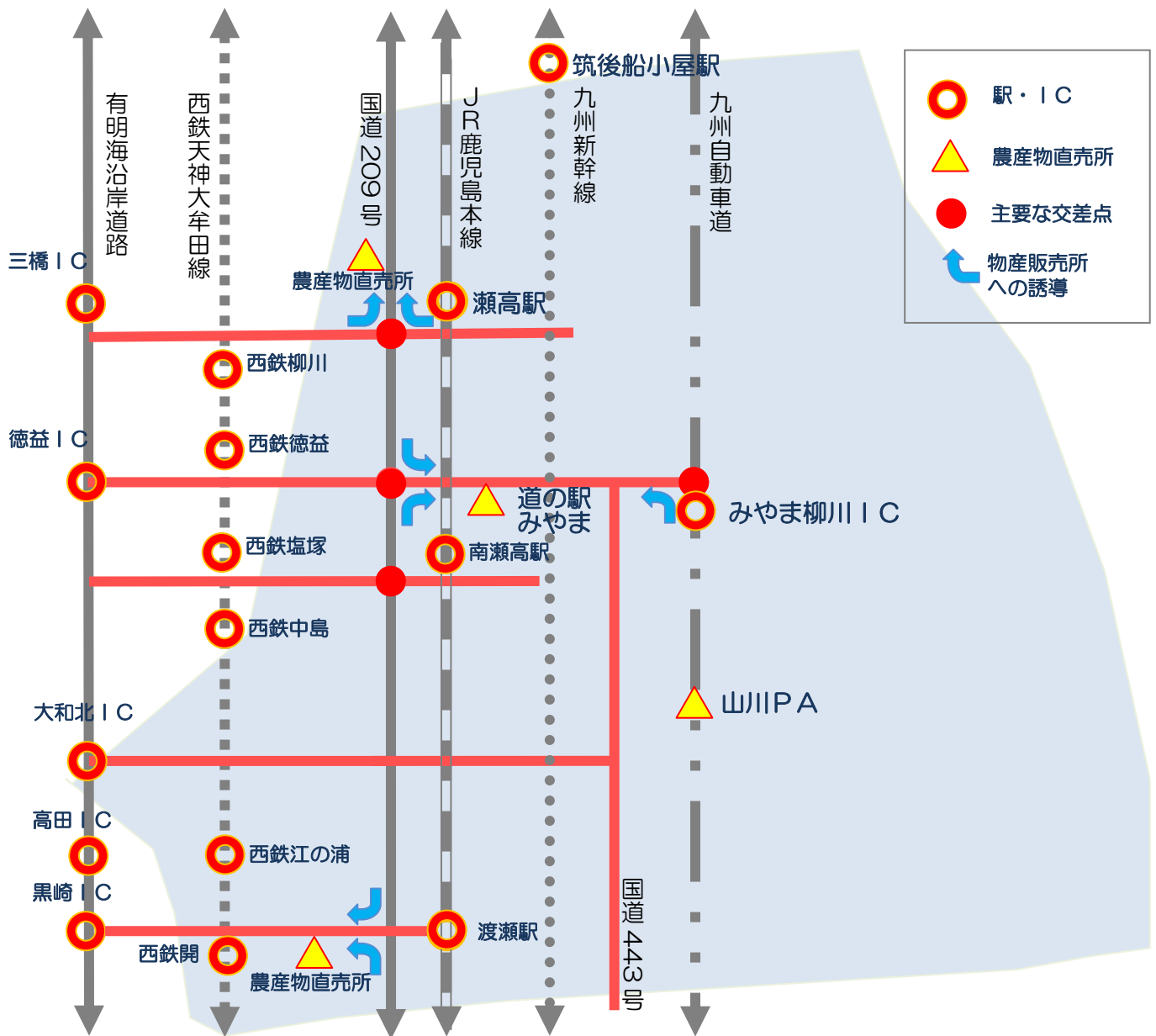
市域もそれらの交通インフラの構造物によって東西に分断されていると考えることも不自然な見方ではありません。もともと、東に山地、西に有明海という地形が九州の中央部において占める役割は、九州北部と南部との連絡通路的な意味合いを持ち、そこから分岐して東西に流れていくという流れは、(鳥栖付近を除いて) 弱かったと考えることができます。今、私達はこうした流れを少しずつ変えていく必要があります。より多くのお客様をみやま市に招き入れるためです。

そのためには、南北の連絡通路から東西への分岐点、あるいは交差点を一つでも多く増やすことです。いわば、**縦糸**で構成された交通網に、**横糸**を絡め、幾つもの**結び目**を造るイメージです。

そうした場所が市内に増え、その幾つかに市民による観光や物産のネットワークの拠点が位置づけられれば、そこに市民と観光客の接点が生まれます。さらに、その分岐路の行く先には、ニーズの多い市内各所の農産物の直売所等へと誘導し、来訪者がそうした場所に自然に流入するような仕掛けとします。

具体的には、主要道路の交差点のデザイン、駅やインター、サービスエリアなどからの誘導システムを新たに形成することになります。

図 10：縦系と横系の結び目（模式図）



みやまの道路網と主要な観光施設を模式的に表した図です。
 みやまを通過する南北の動線に幾つかの重要な交差点があります。そのような場所を重点的に整備し、観光客の誘導や、日常的な宣伝活動の場とします。特に、みやまの観光・物産の振興のために「道の駅みやま」の他にも常設の農産物直売所（卑弥呼の里、花野果館）、時間限定の朝市や販売所（平家の里、鉱泉の駅等）への誘導を行い、それらの物産販売所への観光客の誘導を行います。

5-2 展開イメージ

みやま市内の各所で下記の整備をすすめ、観光客に親切なみやまのまちづくりを実現します。

A：主要な交差点



みやま市内を回遊する際に、観光客が通過する可能性の高い交差点（清水山、金栗、長田、濃施などの交差点）では、スムーズな誘導を行うために、関係者の協力を得ながら全市で統一したデザインのサイン整備を進め、視覚的にスマートなみやまの道案内を実現します。

B：JR瀬高駅・西鉄各駅



各駅から歩いて訪ねるみやまの旅の起点として、最新の観光情報の提供やおすすめの物産などの紹介に努めます。JRウォーキング等の実績を踏まえて、徒歩やツーリングの観光客が周りやすいコース設定などを行います。

C：九州新幹線筑後船小屋駅



新幹線を利用して訪れる関西、中国方面からの観光客が見込まれています。筑後地区の5市2町の自治体で設置する情報発信施設において、観光情報を発信します。

将来的に、みやま方面へ誘導するバスツアーの実現も検討を行います。

D：道の駅 みやま 他直売所



みやまを訪れる人々の楽しみの一つに、新鮮な野菜等の購入があります。市内には、新しい道の駅の他にも2つの常設の直売所と、複数の販売所があります。それらの場所を、観光情報の拠点と位置付け、関係者の理解を得ながら、従来の販売に加えて、観光案内所的な機能の整備を進めます。

E：山川パーキングエリア



かつて山川パーキングエリアは、ニーズが見込まれたため拡充の検討が行われました。その趣旨を継承し、管理者と協力し地元みやまの宣伝や商品を増やすよう働きかけます。



みやま市観光振興計画

第6章

事業計画

この章では、今後の進め方を記述しています。
また、中長期的な展望についても記述しています。

- 6-1：今後の進め方
- 6-2：中長期的な展望
- 6-3：将来的な整備構想

お座敷梅

みやまに春の訪れを告げる座敷梅には近隣の市町村はもとより遠方からも見物客が訪れる。こうした観光資源を活かし、多くの交流人口を生み出すためには、近隣の市町村との広域的な連携も不可欠である。

6 事業計画

6-1 今後の進め方



二つの開業

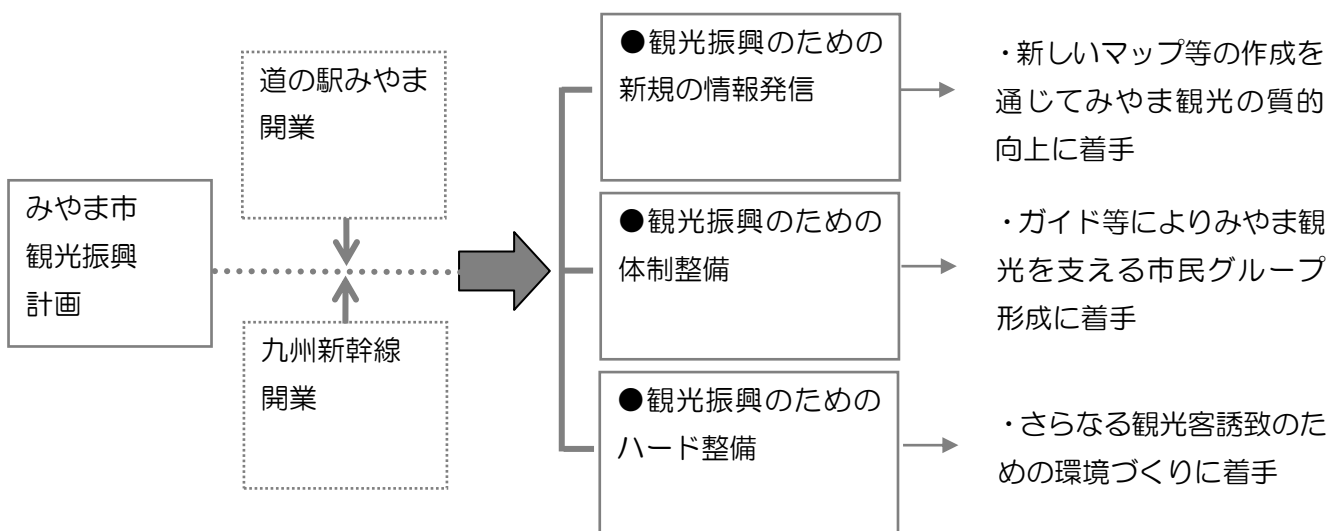
平成 23 年 3 月 12 日に九州新幹線が全線開通し、新船小屋駅も開業した。同じ 3 月末には道の駅みやまが開業し、多くの来店客でにぎわいをみせた。

前章までに検討した内容を具体化していくために、みやま市観光協会では「道の駅みやま」の開業に合わせて、観光情報提供の人員の配置がなされます。

まずは、新規の道の駅として、その経営を起動にのせることが急務ですが、併行して観光案内の拠点として、また、みやまに期待される消費者ニーズを掴むことを進めます。

九州新幹線の全線開業後の反応を見ながら、必要なハード整備等も進めていきます。

また、一方で、みやま市民による観光についての実働的組織の形成を行います。具体的には、ガイドの養成講座等を通じて、みやま市民がみやまのことについて知る機会を増やしていきます。加えて、観光や物産の振興に意欲的に取り組むことを希望する市民を公募し、みやまの観光受入体制の整備に努めます。



6-2 中長期的な展望

6-2-1 商業誘致



農産品直売所「がまだしもん」

道の駅内のこの直売所は、市内を訪れる観光客に対してみやまの魅力をアピールし、将来のリピーターを育てる重要な役割を担う。

みやま市の観光振興は、直接的には交流人口の増加を目指しますが、その波及効果としてみやま産品の販路拡大、農林水産業の若手後継者の育成や耕作放棄地の利活用、みやま市への定住促進などを視野に入れています。より多くの観光客の興味・関心を喚起するみやま市となることを目指します。

結果的に、みやま市への商業やサービス業等の各種企業誘致の呼び水となるべく、恵まれたみやまの立地や資源を活かして多くの来訪者が訪れるまちづくりを進めます。

6-2-2 広域連携



二つの鉱泉

左：長田鉱泉／みやま市瀬高町長田
右：船小屋鉱泉／筑後市船小屋

矢部川を挟み、歩ける距離に長田鉱泉と船小屋鉱泉とがある。一見、よく似た雰囲気であるが、味はかなり異なり何故そうなるのか地学的な興味をかき立てられる。井戸の深さの違いが原因であるが、この二つを同時に体験することによりみやまへの理解が進む。

みやま市を訪れる観光客は、必ずしもみやま市内だけを巡るとは考えにくい面があります。すでにJRウォーキングのコースは、市外の駅を起点にしてみやま市内を訪ねるものも人気を集めています。つまり、観光客は近隣の柳川市や筑後市などを含む一帯を、市町村の境とは無関係に名所旧跡や生産の現場を巡ると考えられます。九州新幹線全線開業などの影響で増加が見込まれる遠方からの観光客ほど、効率よくその土地を知ろうと筑後地区一円を舞台とする旅程を組み立てるでしょう。

そうした現実に対応するには、近隣の市町村との連携を深め、他には無いみやまの個性（例えば樟脳や製蠟、花火などの稀少な生産風景、清水山の景観や長田鉱泉など地形が生み出す魅力など）を売り込み、相互に補完できる関係を築かねばなりません。

また、魅力的なランチメニューを開発するなどして、食事や物産に関する需要をみやまに引き込むことも同時に着手する必要があります。

次項には、具体的に検討された筑後地区の観光コースを例示します。



瀬高ナスを使った料理

地元食材を使ったメニュー開発の例。名産のナスと相性が高い挽肉を用いてハンバーガーやメンチカツを商品化している。まだまだ小規模かつ期間限定の取り組みであるが、こうした独創性の高い味覚の提供の取り組みを、みやまの中で育てていく必要がある。（みやま市瀬高町）

参考：みやま市周辺を含む広域でのモニターツアーコーディネート例
 (太字はみやま市内の見学先を示す)

筑後地区の魅力的な所を巡るコースを考える時、工場見学が多く含まれる傾向にあり、みやまの製
 蠟や花火、樟脳（カド）の工場見学はそうした個性を引き立てるのに役立っている。一方で、みやまの名物
 と呼べる料理が無い（みやまのうどん）ため、昼食場所は筑後市や大川市で設定されている。

表 10：みやまを含む広域（筑後地区）でのツアーコースの事例

	1日目		2日目
午前 大川市	羽犬塚発 09:00 ⇒ 古賀政男記念館着 09:40 発 ⇒ 昇開橋公園着 10:10 (一刀彫、昇開橋確認) 10:25 発 ⇒ 大川市組子工場着 10:35-10:50 発 ⇒ 旧吉原家住宅着 11:15 発 ⇒ 小保・榎津界限着 11:25 ⇒ 庄分酢着 11:45 (工場見学：酢料理で昼食)	午前 みやま市	荒木櫛蠟工場着 (工場見学) 10:10 発 ⇒ お座敷梅着 10:35 発 ⇒ 竹飯花火工場着 (工場見学) 11:00 発 ⇒ 筑後市こがね荘着 12:00 <small>おめつけさまおんげこうおんきゅうはくりょうり</small> 〔御目付様御下向御 休泊料理〕(昼食)
午後 柳川市	庄分酢 13:00 発 ⇒ 目野酒造着 (工場見学) 14:00 発 ⇒ 御花着 14:20 (館内見学と昼食) 14:40 発 ⇒ 川下り会社着 15:10 発 ⇒ 北原白秋生家着 15:35 発 ⇒ 柳川市かんぼの宿 宿泊	午後 筑後市 大木町	こがね荘 13:00 発 ⇒ 船小屋温泉樋口軒着 13:45 発 ⇒ 船小屋鉾泉着 13:50 (試飲) ⇒ ガタガタ橋 ⇒ 長田鉾泉着 (鉾泉) 14:25 発 ⇒ 内野樟脳着 (工場見学) 14:50 発 ⇒ 筑後市久留米緋池田緋工房着 (工場見学) 15:20 発 ⇒ 大木町土俵うどん店着 15:50 発 ⇒ 道の駅おおき着 16:10 発 ⇒ 羽犬塚駅着 16:40

6-3 将来的な整備構想

6-3-1 筑後広域公園（仮称）サブエントランス整備

福岡県では筑後広域公園（都市計画公園）の利便性を高めることによって筑後地域全体の福利厚生の上昇を図ります。

みやま柳川インターの開設により、南側（みやま市側）からの来園者の増加が予想されることや、筑後船小屋駅に隣接することなどから、来園者へのサービス向上や公園機能の強化を行うべく、駐車や案内などのエントランス整備を行います。

既に、みやま市長田地区において、都市計画決定の変更を行い、公園区域として位置づけられております。予定では、駐車場や緑地の他に、天然記念物であるクスノキ林やゲンジボタル等の公園の良好な自然環境に関するガイダンスや情報発信を担う施設の建設が検討されています。

みやま市では、こうした整備に歩調を合わせて、みやまの北側（筑後市）からの玄関口と位置付け、みやま観光の案内などを積極的に行えるよう準備を進めます。



新船小屋交差点

新船小屋橋に向かって緩やかに登っていく道の両側に筑後広域公園のサブエントランス整備が計画されている。みやま市への筑後市側からの来訪者を迎える場所でもあり、みやまの印象を左右する重要なポイントである。

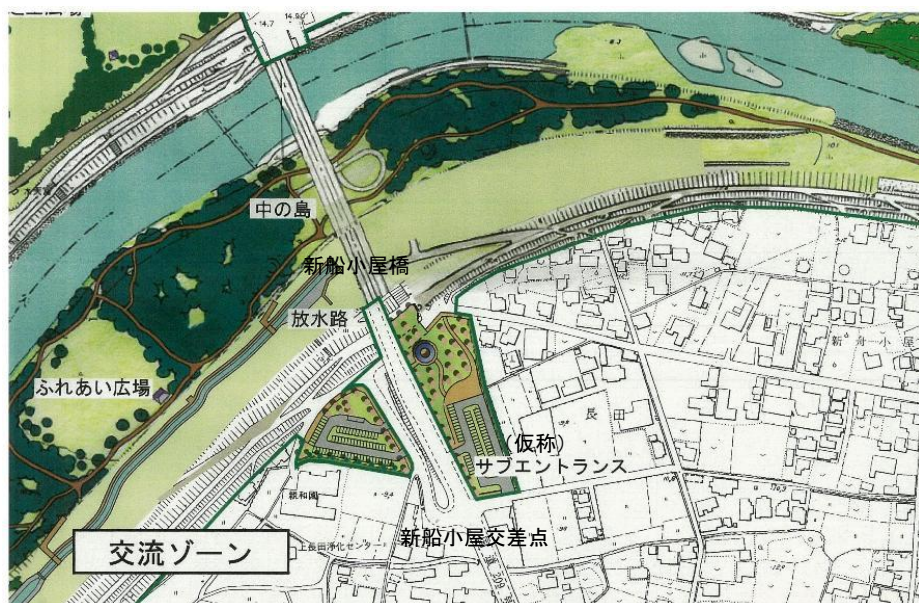


図 11：構想イメージ図

6-3-2 山川パーキングエリア ハイウェイオアシスの検討

ハイウェイオアシスとは

サービスエリア（SA）やパーキングエリア（PA）に接続し、高速道路を出ることなく、公園などの潤いスペースを利用できる施設である。施設は、地元市町村や第三セクター企業などにより運営されている。

平成21年末現在、全国に26カ所が設置されている



山川パーキングエリアとその周辺

この場所を中心に車で1時間で移動できる範囲内に450万人の人口が居住している。

九州自動車道は、我が国の大動脈として人々の生活に不可欠な存在となっています。近年は、通行料金の値下げなどもあり、より身近な存在として多くの利用者が通行しています。しかしながら、一方で、高速で移動するための道路としての構造ゆえに、通過する土地との関わりは稀薄なものとならざるを得ず、それを解消し地域活性化に寄与する高速道路の在り方が模索されています。

一般に、高速道路には常に大量の「人」・「物」・「金」・「情報」が流れています。それらがただ流れ去るのではなく、それらの一部を新たに取り込むことができれば、みやま市にとって大きな事業機会を生む可能性が拓けます。九州自動車道を活用した事業展開を行うことは、みやまに新しい雇用機会と、将来的に安定した生活基盤の構築をもたらします。

そのような意味で、みやま市の山川パーキングエリアには以下のような可能性があり、今後関係者とその実現性について検討していきます。

◆立地の特性

福岡県の南端にあり、熊本県と境を接するみやま市山川町附近は、古くから薩摩街道の宿場町として栄え、江戸期には篤姫も通行しました。現代では高速道路を1日5万台の車両が行き交う、九州の北部と南部が交流する要衝です。周辺都市部からのアクセスの便利さと商圈規模の大きさを見ると、山川パーキングエリアから1時間圏内の商圈人口は、九州最大の福岡市及びその周辺都市と、九州中南部最大の熊本市域にも及び、九州7県の総人口（約1,320万人）の34%に当たる約450万人に達します。

◆高速道路のトレンド

ETCの利用・料金割引の推進・スマートインターチェンジの導入など各種施策により高速道路利用に対する期待感が高まる中で、SA・PAは、施設の増設・更新により、快適性の向上や多様なニーズへの対応が急速に進化しています。また、ハイウェイオアシス（全国26カ所）では、通常のSA・PAでは得られない地域資源（自然・文化など）に関するサービスや情報が提供されるようになりました。今後は、ハイウェイオアシス・スマートインターの整備が、地域活性化の起爆剤として位置づけられることとなります。

◆消費のトレンド

主な消費者ニーズは「安全」、「健康」、「環境」、「癒し」であり、主な食の意識は「健康志向」、「安全志向」、「経済性志向」、「手作り志向」です。また、農産物直売所や地域食材レストランの増加と定着により、食の見直し意識が高まっています。

◆レジャーのトレンド

形態別旅行消費額は、日帰り旅行の増加・国内宿泊旅行の減少・海外旅行の横ばいです。また、不況による可処分所得の減少に伴う国内旅行需要の減少により、手軽な日帰り旅行が増加しています。一方で、ニューツーリズムの推進により、エコツーリズム・グリーンツーリズム・都市と農山漁村の共生・対流等、家族で買い物・食事・レジャー利用が一度にできる（ワンストップ）手軽な余暇の過ごし方が流行となっています。

6-3-3 みやま市内のショールーム・サロン増設の検討

みやまを訪れた観光客が、市内各所でみやまの人々の仕事や生活の現場に触れ、物産を購入する場面を生み出していくためには、道の駅などの大規模な施設の他にも、市民や事業者が個々にショールーム的な空間や、お客さんと親しく話をするのできるサロンのようなスペースを整備していくことが望ましいと考えられます。そうした場所で、製造者本人が製品に込めた想いや、製造の苦労話などを聞かせることで、来訪者はより深くその商品に興味を持ち、購買意欲を高めるからです。

現状では、幾つかの場所にそうしたスペースの用意がありますが、それらの場所が市内各所に増えていけば、観光マップもより充実し、また、観光コースにも幅がでできます。下の写真に示すような場所や場面を意識的に伸ばしていくとよいと思われます。

あまり大がかりな設備は必要ありませんが、暑くない木陰や椅子・テーブル、紹介したい内容を示したパネル等の情報発信のツール、それにそこがショールームやサロンであることを示す看板サインなどを整備することから始めれば十分です。みやま市内にそのような場所が増え、観光客とみやまの人が接する機会を増やすことができれば、みやま観光に深い魅力が生まれます。

基本的には、個々の営業戦略の強化の話ですので個々に努力すべき内容ですが、今後関係者の話し合いを踏まえて、具体的な整備のイメージを定め、できるだけ多くのショールームやサロンが生まれることを推進します。

図 12 みやま市内のショールーム・サロンスペースのイメージ



製造工程の説明や見学
説明のためのパネルや覗くことのできる作業風景



人目を惹くディスプレイ
商品の品質イメージを高める工夫



談話スペース
腰を掛けてお茶を飲みながら
気軽に話せる場所



商品の陳列
照明などにも気を配り、商品
をよりよく見せる工夫



呑みくらべ
お客さんが好みを見つけ
やすくするための工夫

みやま市観光振興計画

資料編

みやま市観光振興計画 策定の経緯

みやま市観光振興計画策定委員会設置要綱

みやま市観光振興計画策定委員名簿

平成22年

- 9月10～30日 市内事業者への個別ヒアリング
- 11月16日 市内業者とのワークショップ
- 11月23日 「JRウォーキング」参加者アンケート調査
・JRウォーキング清水山コースの参加者にアンケートを実施
- 11月27日 九州再発見「みやまに行こうバスツアー」参加者アンケート調査
・(主催) NPO 法人九州地域交流推進協議会
- 12月27日 第1回みやま市観光振興計画策定委員会
・観光振興計画の骨格について

平成23年

- 1月13日 ゆらっと浪漫路＝九州〔筑後七国〕ツアー下見
- 2月14日 先進地視察 熊本県宇城市・氷川町
- 2月23日 第2回みやま市観光振興計画策定委員会
・観光振興計画素案審議
- 2月28日 観光振興計画(案)パブリックコメント
～
・観光振興計画素案に対する市民からの意見募集
- 3月15日
- 3月18日 第3回みやま市観光振興計画策定委員会
・観光振興計画素案審議

みやま市観光振興計画策定委員会設置要綱

(設置)

第1条 みやま市観光振興計画（以下「振興計画」という。）の策定に関し、必要な事項を審議するため、みやま市観光振興計画策定委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会の所掌事務は、次のとおりとする。

- (1) 振興計画の策定に関すること。
- (2) 振興計画の実施方針の決定に関すること。
- (3) 前2号に掲げるもののほか、振興計画策定に関し必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、別表に掲げる機関等に所属する者のうちから選出された者をもって組織する。

2 委員会の委員は、市長が委嘱又は任命する。

(委員の任期)

第4条 委員の任期は、前条の規定による委嘱又は任命の日から振興計画の策定が終了するまでとする。

2 委員が欠けた場合における後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長1人を置く。

2 委員長は委員の互選により定め、副委員長は委員のうちから委員長が指名する。

3 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第6条 委員会の会議は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員長が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、その説明又は意見を聴くことができる。

(庶務)

第7条 委員会の庶務は、環境経済部商工観光課において処理する。

(その他)

第8条 この告示に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

この告示は、平成22年11月10日から施行する。

別表（第3条関係）

機関等	人数
みやま市	1人
みやま市教育委員会	1人
みやま市観光協会	2人
南筑後農業協同組合	1人
みやま市女性倶楽部	1人
みやま市商工会	1人
みやま市区長会	1人
みやま市文化財専門委員会	1人

みやま市観光振興計画策定委員名簿

役職名	氏名	機関等
委員長	大田黒誠之	みやま市観光協会
副委員長	北村 眞弓	みやま市女性倶楽部
委員	古賀セイ子	みやま市観光協会
	武宮 国久	南筑後農業協同組合
	中野 義實	みやま市商工会
	大久保 直喜	みやま市区長会
	半田 隆夫	みやま市文化財専門委員会
	酒井 聖	みやま市
	坂本 学	みやま市教育委員会

みやま市観光振興計画

平成 23 年 3 月

■編集・発行■

みやま市環境経済部商工観光課

〒835-8601

福岡県みやま市瀬高町小川 5 番地

TEL 0944-64-1523

FAX 0944-64-1524

URL <http://www.city.miyama.lg.jp>

